

## アイリス・マードックの倫理性

### —『快と善』を中心に—

大 社 淑 子

現代イギリス文壇の重鎮、アイリス・マードック (Iris Murdoch) の第11作『快と善』 (“The Nice and the Good”) は、1968年、チャトー・アンド・ウィンダス社から出版された。女流批評家のエリザベス・ジェインウェイ (Elizabeth Jane-way) は、この作品の書評で、次のように述べている。

「これは、アイリス・マードックの最もすぐれた、最も興奮させる、最も成功した作品であるように見える。その過程の3分の2が書き得ない事柄なのだ。」(註1)

果してこの讃辞は当たっているのかどうか、私はいささかの疑問を感じている。私自身の好みから言えば、第4作の『鐘』 (“The Bell” 1958) や第7作『一角獣』 (“The Unicorn” 1963) などの方が、ずっと作品の緊密性もあり、抒情性もあって、すぐれた作品のように思われる。それに対して、『快と善』は、その題名からも伺われるように、ひとつの emotion を小説という文学形式に定着したというよりは、ひとつの考え方を、小説というメタファーに包んで提示したいという印象が強い。それだけに、読み終って、ある心の感動が残るというよりは、作者の形而上学を図式化して見せられたようで、それも、十分な形ではなく、何か中途半端な形で見せられた感じが強く、その意味では、「最も成功した作品」とは言い難いのではないかと思う。しかし、マードックの作品がどれも、読者の興味を強く惹きつける事件に充ちているばかりでなく、1章ごとに、意表をついた新しい局面の展開をみせることを特徴とし、作者の哲学は織りこまれていながら、それが登場人物の機智に富んだ会話の範囲にとどまって、深く究めつくすところまでは行かないことを考えると、この一見して欠点のように見える物足りなさも、作者の計算しつくした技法の1つであろうか、とも思われてくる。

いずれにしても、『快と善』には、マードックのどの作品よりも、作者の哲学、ことに善に対する考え方が、具体的に提示されているように思われるので、この作品を中心に、マードックの善の思想を跡づけてみたい。

マードックは、『サルトルーロマンチックな合理主義者』（“Sartre - Romantic Rationalist” 1953）の論文によって、華々しい作家的出発をした、実存主義的作家であるとみなされているが、彼女は、どういう傾向にもましてモラリストであるように、私には思われる。そして、ほんの少し喜劇的で、ほんの少しバカバカしく、スリルとサスペンスに充ち、夢と神話をないまぜたようなユニークな味のする Murdoch land は、何よりも、倫理小説と呼ばれるにふさわしい。表面的には、倫理小説の対立要素にみえる、こうした喜劇性、意外性、不道德、神の否定等の奥に、一貫したイギリス的なモラルの底流がある。そうして、作者は、すべての小説、すべての小論文を通して、執拗なまでに「善」を追求しつづけているようにみえる。こうした意味で、マードックの善に対する考え方を跡づけることは、モラリストとしてのマードックを浮彫りにする作業に繋がっていると私は考える。

マードックの作品では、数多い登場人物が、さまざまな愛のかたちによって結びつき、離れ、また相手を変えては愛によって結びつくといった、いわば順列組合せの実験にも似た、人間関係の唐草模様を織り出すのが常であるが、『快と善』も、その例外ではない。登場人物は、どの作品より多く18名に達し、それに、猫と犬がそれぞれ1匹ずつ加わって、マードック的「真夏の夜の夢」を展開する。

物語の舞台になっているのは、ロンドンの官庁街と、平和でのどかな海岸の避暑地、ドーセットのトレスコム・ハウスである。

夏のある午後、官庁の一室でピストルの音が響き、ラディチーと呼ばれる、最近妻と死別した男が自殺する。駆けつけた新聞社が嗅ぎ出したところでは、女性関係と脅喝の疑いが濃厚で、部長のオクタヴィアン・グレイは新聞社に対処するため、また、機密が洩れてはいしなにか調査するために、彼の秘書リチャード・ピラニイと法律顧問の弁護士兼親友のジョン・デュケインを含む調査班を組織する。一方、海岸のオクタヴィアンの別荘、トレスコム・ハウスに集っているのは、彼の妻ケイトと、休暇でスイスの学校から帰ってきた娘のバーバラ。ピラニイの離婚した妻ポーラと、その双子の兄妹エドワードとヘンリエッタ。ケイトの女学校時代の友人で未亡人のメア

リ・クロチェと息子のピアス。それに、何かの暗い秘密を抱いてインドから帰ってきたオクタヴィアの兄テオと、孤独で偏屈な古典学者ウィリ・コスト。週末に、この別荘にやってきたデュケインは、43才のピューリタンで、小学校の絵画教師で28才の、ジェシカ・バードと恋愛関係にある一方、ケイトにも愛情を感じており、ジェシカと別れようとするが、なかなか志を達することができない。ポーラは、ピラニイとの離婚の原因となったエリック・シアスが、オーストラリアから彼女を求めに帰って来ることで悩み、メアリは、ウィリを慰めるために、彼に結婚の申込みをして断られる。

デュケインは、ロンドンでラディチーの事件を調査しているうち、後者が種々の女性を集めて、オフィスの地下濠で呪術を行っていたこと、メッセンジャー・ボーイのマックグラスと、「トロイのヘレン」と呼ばれる彼の美しい妻ジュディは、共謀して、政府、官庁の高官を誘惑しては、その後、脅喝を働いていたこと、さらに、ラディチーは、妻とピラニイの関係を嫉妬して、妻を窓から突き落して殺し、それを目撃したピラニイの脅迫が耐えきれなくなって、彼の目前で自殺をしたのだということなどを知る。

一方、15才の少年ピアスは、1つ年下のバーバラに対する愛が報われないのに絶望して、自殺の目的でガナーの洞窟に入りこみ、それを助けに行ったデュケインは、ようやく彼を見出し、少年と共に岩の僅かな割れ目から外側へよじ登って、辛うじて満潮時の溺死から免れる。この経験がカタルシスとなって、ピアスはバーバラの愛を得、デュケインとメアリは真実の愛=善にめぐめて結ばれ、ポーラはピラニイの許へかえり、デュケインはピラニイの罪を黙許してやる。たびたびデュケインを誘惑しようとして果さなかった「トロイのヘレン」=ジュディは、デュケインの従僕と駆落ちし、ジェシカ・バードは、ウィリに愛される。

以上、簡単に述べたように、この作品も、マードックの他の小説とおなじように、愛を主題としていると考えられるが、この小説において、作者は主として2つの愛のすがたを強調しているようにみえる。すなわち、オクタヴィアン・グレイとケイト夫妻によって代表される、高い社会的地位、経済的水準を支えられた、快樂的、自己満足的な愛と、デュケインとメアリ・クロチェの間に自覚される非個性的な愛である。そして、作者は、前者の愛を「快」と名付け、後者の愛を「善」と呼ぶ。

しかし、いうまでもないことながら、善=愛ではない。愛は、善の対蹠物、悪をも含みながら、善に近づくための最も有効な手段のひとつと、マードックは考えているようにみえる。では、マードックが考える善とは、どういうものであろうか。

彼女の善に対する考え方は、1967年11月14日、ケンブリッジ大学でマードックが行なった『他の諸概念に対する善の至高性』（“The Sovereignty of Good over Other Concepts”）と題する、レズリー・スティープン記念講演に最も具体的に、かつ詳細に示されている。この小論文の中で、マードックは、人間の善を追求する態度を1つの認識の過程として捉え、この過程を『共和国』に表われたプラトンの比喩を用いて説明する。

まず、マードックは、真実の認識に到達する以前の人間を洞窟に繋がれている囚人になぞらえる。囚人の眼の届かぬ後の方であかあかと火が燃え、その光が、火と囚人の間におかれた操り人形の影を、囚人の眼の前の洞窟の壁に映し出している。囚人は、この人形の影を実在の世界だと思い誤っているのだと、マードックは言う。この無知の状態が認識の第一段階であるとすれば、第二段階は、囚人がふりかえって、火と操り人形を見る過程である。暖かさとエネルギーの根源である火は、自己であり、古い、まだ生まれかわらぬ精神であると彼女は言う。従って認識の第二段階は、自己認識の過程であって、人は、盲目的な利己本能に支配されたエゴの幻影が彼の世界いっぱいになり、広がるのを見るのだと考えることができる。しかし、彼等の大部分は、外界の存在を知らず、烈しい探求心をも持たないために、火を太陽と誤解し、そのまま、暖かい火の側に坐りこんでしまう。さらに、強烈的な認識への欲求をもつ者だけが、洞窟の外へ出て、太陽=善の光に照らされた真実の世界を見る。（註2）しかし、我々が太陽に照らし出されたものは見えても、太陽そのものを直視することは難しいように、善の光のもとに、この世の事物を真実の関係においてみることはできても、善そのものを見ることは至難の業であると、マードックは言う。（註3）そして、この善は、人間の弱さのため、また、距離の遠さのために、神秘のままになっており、「我々が、自分の外側を見ると、我々が見るのは、ちりぢりになった善の暗示のみ」（註4）であると。

従って、小説の世界においても同様、善そのものを提示することは不可能であるから、マードックは、「ちりぢりになった善の暗示」すなわち、愛の様態を通して、善を描こうとしているようにみえる。さきにあげたエリザベス・ジェインウェイが、

「その過程の3分の2が、書き得ない事柄なのだ。」と述べた所以であろう。

では、何故に、愛は最も直接的な「善の暗示」となり得、マードックは、これほど執拗に、多種多様な愛を描こうとするのか。私は、第一の理由として、愛は、「必然性と機会に従属した、束の間の、死すべき動物である」（註5）人間が、この不条理の世界において見出す唯一の救いであり、人と人とが結びつき得る唯一の可能性であるからだと考えたい。もちろん、こうした実存的条件に限定された惨めな人間が、愛によって、存在の桎梏から解縛されるわけではない。しかし、愛こそは、「存在する唯一のものであり」（註6）、愛によって、人々は、この世における束の間の自己成就をなすことができるからだ。第2の理由としては、『他の諸概念に対する善の至高性』の中でマードックが説く、愛の対善志向性が挙げられる。彼女は、人間の愛は、普通、無遠慮な自己主張を含み、執着の代名詞となるために、無限の墮落や悪を可能とするものだからという理由で、愛を善の下位に置いているが、この2者の関連について、「善とは、愛が自然に動いてゆく磁力の中心であり」（註7）、「愛とは、不完全な魂と、その彼方にあると思われる吸引力のある完全との間の緊張だ。」（註8）と述べている。さらに、マードックが、愛と善の関連性について次のように言うとき、愛を作品のテーマとする彼女の意図は明らかである。

「どんな愛も、たとえ、軽薄な心が軽薄な心に呼びかけていたり、卑小な心が卑小な心によびかけていたときであっても、全く価値なしではあり得ない。善を識別することが愛の性質中にあるからであり、いずれにしても、最上の愛は、幾分かは、善なるものへの愛である。」（註9）

『快と善』においては、梗概で述べたように、この善を志向する愛のすがた、利己的な愛から、善なるものへの愛の心理的過程を、作者は、主としてデュケインの愛を中心に描いているようにみえる。

デュケインは、青い眼と鉤鼻をしたインテリ。やや神経質で、長期間の恋愛関係を耐えることができず、ジェシカとの恋では、自分に結婚する意志がないので、たえず罪悪感に悩まされている。また、彼は、不安定な官能の慰めを、複雑で洗練された知的刺激に求めようとするが、ジェシカは、とうてい、その器ではなく、彼は友達つきあいをしたいのに、彼女は愛人としてふるまい、彼の苛立ちと挫折感をますます増大

させる。

さきあげた洞窟のメタファーによればデュケインとジェシカとの恋は、認識の第一段階、すなわち、洞窟の中に繋がれた囚人の状態になぞらえることができる。ジェシカの知性に対する彼の苛立ちは、実在の世界を知りたいと思うのに、壁に映る影しか与えられない囚人の苛立ちを思わせ、また、彼女との恋愛関係を清算しようとして果せず、18ヶ月も妥協の構えを重ねている彼の姿には、囚人の手足を縛る鎖の重さを読みとることもできる。

しかし、彼の心のうちに燃えあがる知的探求心と、清らかで質素な生活を送る善人になりたいという渴望は、遂に、囚人に解縛の勇気を与える。彼はふり向いて、火を見るのである。彼とケイトとの恋は、囚人の第2の認識過程と考えてもよいだろう。第1の段階が無知と誤謬の過程なら、第2の段階は、自己認識の過程であり、「快」の過程である。しかし、この自己認識は、全体の中における正しい自己の位置の確認ではなく、膨張し、拡大された自己が、世界＝洞窟を覆いつくしているのを見ることであり、正しい認識とはいえないゆえに、やはり、一種の妄想にしかすぎない。マードックによれば、正しい認識を得ること、つまり、あらゆる事物を真実の関係のもとにみることができるのは、ひとり、善の照らし出す光のもとにおいてのみ、可能となるからである。

では、マードックの言う正しい認識とは何か。事物を、真実の関係において見るということは、どういうことなのか。いうまでもなく、この認識方法の根底には、彼女の実存主義的思想がある。すなわち、我々人間は、「偶然によって生まれた」「偶然の動物で、我々の理解できない力によって動かされ」、「街の中に歩いてゆき、一台の車に轢き殺されることができる」（註10）自由のみをもっているのであり、生命とは、無目的で自己中心的なものにすぎないという認識のもとに、自己自身をみることである。また、『ブルーノの夢』（“Bruno's Dream” 1969）のニジェルが言うように、神の存在しない、この不条理の世界にあっては我々自身が「たわけた神の、たわけた司祭」（註11）なのだということを知ることででもある。こうした無常な現実を真実に認識し、受容することは、無私を見る試みにつながり、人間を謙虚にするのだと、マードックは考える。すなわち、善の光が入りこむところに、倫理意識が芽生えてくるのである。

しかし、このような善の光を知らない洞窟の第2の認識の段階にあっては、愛はそ

れ自体に安住して、洞窟の外の世界があろうとは夢にも知らず、知ろうとも思わない。ふりかえりはしたものの、火を太陽と思い誤まって、火の側に腰を下ろし、ぬくぬくと自己満足している囚人のように。だから、この世界の住者、ケイトは言う。

「自殺なんて、とんでもないわ。そして、私にとっては、人生はいつも、とっともおもしろいのよ。」（註12）

そして、ケイトに心を奪われているデュケインが答える。

「我々のように普通の健康な心をもっている人間には、人間の意識の全様態が、痛ましく、地獄であることが、どんなものか想像することは難しいね。」（註13）

こうした快樂主義的な、幸福で、親切で、お人善しのケイト夫妻を、作者は次のように描写している。

「彼等二人には、のんきな雅量、正義をなそうと太っ腹に心を決める雅量ある罪人であったかもしれない人々の寛大さといったものがあつた。彼等は、幸福な結婚生活をしており、他の人々を幸福にしようという努力を、自発的にしていた。」（註14）

従って、メアリをはじめとして、彼女の側で暮らす人々は、「ケイトと彼女の夫の、ゆたかな自己満足と黄金の生命を与えるエゴイズムが」「ちっぽけなものではあるけれども、救いの恵みとなる快樂主義を与える」（註15）ような印象を受けるけれども、この快樂主義は、太陽の熱と光が与える本物の救いではなく、焚火の光と暖かさが生み出す救いの虚像であるということができよう。

この意味では、表面的には、幸福にみち溢れ、幸福を撒きちらしているかにみえる美しいケイトの姿も、善の光の下では、地獄における亡者の姿に等しいと、作者は言っているようにみえる。誰にも打ち明けることのできない苦痛と悲慘を経験して、今では、孤独な小舎から静かに人生を觀照しているかにみえるウィリは、次のように、メアリに対して地獄を説明する。

「そうだねえ、地獄では、人はよい変化に対するエネルギーを欠いているのだよ。実際、それが地獄の意味なのだよ。」

「とにかく、それは人間に、人が何者であるかを見せてくれると私は思うわ。」

「ときには、それさえもしないのだよ。結局、人間というものは何なのだね？我々は影なのだ、メアリ、影なのだ。」（註16）

洞窟の火の側に留まるかぎり、我々は影の存在、地獄の亡者にすぎない。そして、この地獄の世界から脱出する契機を与えてくれるのは、「よい変化に対するエネルギー」であり、真実の認識に対する烈しい渴望である。だから、最後まで「快」の段階を脱することのないケイトが、終始、自分を幸福とおもい、決して自己反省をしたり、苦しんだりすることがなく、匿名の手紙でデュケインとジェシカとの恋愛関係を知らされたときでさえ、夫と陽気に話しあうことでさらりとそのジレンマを脱けてしまうのに対して、デュケインの方は、たえず、恋に悩み、裁き手としての自己のあり方、善人のあり方について深くつきつめて考える人間として描かれている。善への志向、たえざる自己省察は、「よい変化に対するエネルギー」に他ならないから。こうした心の状態を知らないケイトにとっては、「ちょうど、彼自身が一束の神経」であり、「一本の破れた葦」（註17）にしかみえないテオでさえ、彼自身の身を苛む苦痛によって、真実の認識を求めての苦闘によって、善を介問みることができる。作者は、テオの黙想を藉りて、「快」と「善」の落差について次のように語っている。

「テオは、快を善から引離している距離がみえてき、このギャップの幻影が、彼の魂を恐怖させた。彼は、はるか彼方に、世界で最も怖ろしいもの、愛のもう一つの顔、そのノッペラポウの顔を見た。彼のかつての存在すべて、彼の存在の最良のものさえ、所有的な自己充足的な人間の愛に繋がっていた。その空虚な要求が、彼の全存在の死を意味していたのだ。」（註18）

すなわち、「快」とは、「所有的な自己充足的な人間の愛」であって、死に繋がり、それを超えた善を志向する愛によって、人は真実の生を得ることができると、マードックは言っているように思われる。

善はしばしば、その対極にある悪との対比によって、考察され、説明される。『快



と善』も、その例に洩れず、牧歌的なオクタヴィアンの別荘と際立った対照をなす、暗く、緊張したホワイト・ホールの雰囲気の中に悪を描きこんでいると言うことができるが、マードックの図式によれば、善と悪の分岐点は「快」の段階であると考えられる。すなわち、「快」の段階が1つの自己認識の過程であるとすれば、人は、この認識を基にして、さらに自己に収斂するか、あるいは、それを超えた真実の世界の認識を志向するかによって、一方は悪へ、他は善へと繋がるのだと、マードックは言っているように思われる。マードックは、この小説において、悪のすがたを、マックグラス夫妻、ピラニイ、ラディチーと言ったような、ホワイト・ホールに巣喰う一連の人々によって描いているが、いずれの場合にも、悪の本質を、人間の利己性、「肥った自己」（註19）に由来するとしている。自己に収斂することは、自己を超越することを不可能にし、向上への努力を否定するばかりでなく、自己をますます肥らせるために、あらゆる非人間的な行為に走る動機となるからである。デュケインは、暗く、陰湿な地下壕の魔術の部屋で、ついにラディチーの暗号を解読することに成功し、悪の正体を知る。

「けっきょく、あらゆる悪の機械、逆さ十字架、弑逆された鳩、それらの中心になっているすべてのものが、非常に空虚で子供らしく見えた。……偉大な悪、怖ろしい悪、戦争や奴隷制度や、あらゆる人間の人間に対する非人間性を作るものは、ピラニイや彼自身のような全く普通の人間たちの、冷静な、自己正当化をする無慈悲な利己性の中にあつた。」（註20）

そして、最後に、デュケインは、ガナーの洞窟で死と対峙したとき、はじめて、彼の眼には、世界がその真実の関係において見えてくるのである。今までに正しいと思いつこんでいた律法がその価値を失い、善人で、正しい男、正しい裁判官になりたいという今までの彼の欲求も自負も、みごとに崩壊してしまう。彼は考える。

「私が万一ここを出ることがあったら、私は誰の裁き手にもなるまい。小さなねずみを殺すこと以外には、何もする価値のあるものはない。裁くことも、優越することも、力をふるうことも、求めて、求めて、求めることも価値がない。愛して、和解して、赦すこと、これだけが大事なのだ。すべての力は罪で、すべての律法は脆

---

い。愛のみが正義なのだ。赦し、和解であって、法ではない。」(註21)

囚人は、ついに、洞窟を出て、太陽＝善の光に照らされた世界を見るのである。ブラトンの比喩における道徳的巡礼が、洞窟を出て最後の真の認識の段階に到達するのに対応して、デュケインがガナーの洞窟を出て、善に裏打ちされた愛にめざめるという構成は、興味深い。

メアリに対するデュケインの愛は、ジェシカやケイトに対する愛のような、自己充足的な、快樂的な、執着する愛ではない。彼は自己向上の努力の支えとして、メアリを必要とし、彼女を「謙譲を志す彼の慰めになる片割れ」(註22)として、「母なる女神」(註23)として、愛するのである。すなわち、互に善を求め、善によって生きようとする謙虚な道徳的巡礼同志として、愛しあうのである。従って、愛自体が目的ではなく、愛は、善に近づくための、最も効果的な1つの手段と考えてよい。デュケインと同質の倫理性をもつメアリ・クロチェもまた、ガナーの洞窟へ向う救助ボートの中で、死んだ夫、溺死しかけている息子に対して、この愛を経験する。

「死が生じ、愛が生じ、あらゆる人間生活には偶然や機会が詰っている。もし人が、そんなに脆く死すべきものを愛し、しがみつくてリアのように、人は愛し、しがみつくものなら、人の愛というものは変ってゆくはずはないのか、そこには、唯一の絶対的命命、愛せよ、との命命があるだけだ。しかし、人はどうして死ぬべきもの、実際に死んでいるものを愛しつづけることに耐えていけるのだろうか。おお死よ、私を揺って眠らせておくれ。私を、静かな憩いへ連れて行っておくれ。私の疲れた罪ある魂を、私の気懸う胸から連れ出しておくれ。人間は、彼自身、この土の1かけら、この脆さの調合物、偶然的な世界のカオスの上の瞬間的な影なのだ。死と機会とは、そこにあるすべてのものの材料なのだから、もし愛が何かの愛だとしたら、それは、死と機会の愛でなければならない。この変化した愛が、偶然の太平洋の上を、死のかたちの上を動き廻る。ほとんどそれと判らぬほど非個人的で、冷たい愛、美しさのない愛、もはや名前もわからない、経験とは、あまり似ない愛。」(註24)

この愛は、人間性を越えたアガペーの愛であると考えてよいだろう。すなわち、自

己充足的な「快」の顔をもつ愛は、エロスの愛であり、善に裏打ちされた愛は、アガペーの愛にまで高まり得るのだとマードックは、言っているように思われる。この愛を透して善をみることにより、人は、人間の心へのしかかり、圧迫し、苛みつつける過去との絆を断ち、人間の無条理性をも、死をも超えて、真実の生に到達することができるのだと、マードックは言っているようだ。こうした意味では、愛による認識の過程は、真実の生に対する認識の過程でもあり、倫理的人間が迎らねばならぬ initiation の過程であるとも考えることができる。

このように、マードックは、偶然性と機会に従属した人間という、実存主義的な実在認識から出発して、プラトン流の善を導入することにより、アガペーの愛に具現される1つの救いに到達したと考えることができる。唯一の統治者であり、絶対者である神を失って、いったんは絶望の底に沈んだ人間が、善によって、1つの形而上的統一に到達し、現実世界のカオスを超克する力を得る、というのが、この作品に表われたマードックの倫理であるようにみえる。そして、テオが黙想するように、この統一体である善によって、人は「過去の暴政を破り、個性に対する悪の粘着を破り、ついに個性そのものを破り」「善の光のもとに、所有されているわけではなく、それ自身の場所に単に存在している悪を見」（註25）るのだと、作者は言う。

このように、マードックが説く、道徳的巡礼が歩く行程は、奇妙なほど、聖書が説く謙虚さや愛に酷似している。彼女が、人間は、自己の存在および、自己がおかれた世界の無目的性、無価値性の認識から出発せよと説くとき、この言葉は、かの有名な「幸福なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり」（註26）のキリストの言葉を思いおこさせる。また、彼女が説く善、大文字ではじまる Good の言葉は、わずか1文字を除いてGodにおきかえても、さほど大きな異和感を感じさせないほど、ふしぎに神を求める人の言葉に似ているようだ。そして、彼女が謙虚で善なる人間の像を描こうとして、「神に向かって魂を投げ出すことは、魂の利己的な部分を苦刑に処するのではなく、死に処するのである。」（註27）というシモーヌ・ヴェイユの言葉を引用するとき、彼女は、計らずして、彼女の倫理性と、キリスト教との親近性を露呈しているように、私には思われる。また、一貫して愛のすがたを描きつづけ、善に近づくために、愛せよ、愛せよと説く、マードックの主張の中に、私は、あの、コリント前書13章の愛の讃歌の響きを聞くのである。

- 
- 註 1. Elizabeth Janeway: The Nice and the Good. The New York Times Book Review. Jan. 14 1968.
  - 註 2. Iris Murdoch: The Sovereignty of Good over Other Concepts. Cambridge University Press p. 32~3.
  - 註 3. Ibid. p. 22
  - 註 4. Ibid. p. 31
  - 註 5. Ibid. p. 3~4
  - 註 6. Iris Murdoch: Bruno's Dream. A Dell Book p. 288
  - 註 7. Iris Murdoch: The Sovereignty of Good over Other Concepts. Cambridge Univ. Press. p. 35.
  - 註 8. Ibid p. 35
  - 註 9. Iris Murdoch: the Nice and the Good. Chatto & Windus, London. p. 333
  - 註10. Iris Murdoch: The Time of the Angels. Penguin Books p. 173.
  - 註11. Iris Murdoch: Bruno's Dream. A Dell Book. p. 222
  - 註12. Iris Murdoch: The Nice and the Good. Chatto & Windus, London. p. 47.
  - 註13. Ibid. p. 47.
  - 註14. Ibid. p. 19~20.
  - 註15. Ibid. p. 21~22.
  - 註16. Ibid. p. 273.
  - 註17. Ibid. p. 47.
  - 註18. Ibid. p. 348.
  - 註19. Ibid. p. 319.
  - 註20. Ibid. p. 320.
  - 註21. Ibid. p. 305.
  - 註22. Ibid. p. 334.
  - 註23. Ibid. p. 334.
  - 註24. Ibid. p. 307~8.
  - 註25. Ibid. p. 344.

註26. マタイ伝, 第5章, 第3節。

註27. Iris Murdoch: *The Sovereignty of Good over Other Concepts*.  
Cambridge Univ. Press. p. 37.